

りも精緻な論理を縦横に駆使し、ドイツ観念論を媒介として独自の真宗教学を樹立させようとしている論旨の行間に、当時日本全体が業火に駆られて無の深淵に真一文字に進んでいたことへの内省、いな抗議を読みとるのは行過ぎだろうか。

(岸 繁一)

(B6版・一六六頁・文楽堂書店・昭和五十九年三月十日刊・二、〇〇〇円)

グラーゼナップ著  
大河内 了義 訳

『東洋の意味』

ドイツ思想家のインド観

本書は、Helmuth von Glasenapp (1891-1963) の著 *Das Indienbild deutscher Denker* (Stuttgart 1960) の翻訳である。

訳者は、この原題「ドイツ思想家のインド観」を副題として掲げ、本書を「東洋の意味」と題す。

著者グラーゼナップは、本書を「ドイツの精神史におけるインドの位置を問題にしようとする仕事」(本書二一七頁)であるとする。そして以下に述べるようなドイツの思想家たちを一人一人取り上げ、その「イ

ンド観」を引いて適確に批評していく。ともすると読者は、ドイツの知識人たちが抱いたインド像について、ドイツの名高いインド学者がそれを正していく姿を想い浮かべるかもしれない。しかし少し読みすすめば、上に引いた著者の言葉にいささかの誇張もないことが判然とする。

著者は、いわゆる「ドイツの精神」の本流を形成してきた思想家たちを真向うから取りあげ、彼らがどのようにインドあるいはその思想を受け取め、どのような意味を与えてきたのかを克明に述べていく。このような仕事はややもすると、特殊「インド」への関説を拾い集め羅列するにすぎないということにもなりかねない。にもかかわらず、「インド」という単に一つの局面からドイツの精神史の断面が見事に切り開かれるものであることを本書は証明している。それはまた、ドイツの思想家たちにとって、インドがいかに大きな意味をもっていたかを物語ることになる。

彼らの抱くインド観は、実にさまざまである。本書には、著者自らが編集しなおして決定版を出したというカントの『自然地理学』(本書の「前書き」参照)のなかに記述されるインドにはじまって、インドを

非常に近くにみようとしたり、逆に何ら問題にするにたらないとしたりというように、極から極へとふれるインド観がくりひろげられていく。例えばヘルダーのように、インドは「神々しく光輝く」(二三頁)とこころであったし、あるいは「インド人の会話は極めて恥知らずなもので、イギリスの船乗りですら顔を赤らめるほどである」(七四頁)とあって何ら憚らぬヘーゲルのように、インドは「単に志操も最低の段階に停滞したままの、歴史をもたない人間の群集の住むところ」(八三頁)であった。

しかし、この多様なインド観のなかにかえって、インドを視野にいれざるを得なかったドイツ思想家たちの格闘ともいえるような、意味の探究を讀みとることができるようになる。さらにいえば、これは著者自らが、インド学者であるにとどまらず、自らの精神を培ってきたドイツの精神を問題にして、自らの格闘をそこに投げ込んだともいえないか。このような点からいって、

本書はたしかに「東洋の意味」を問うドイツの思想家たちを、さらに著者自らを問題にしようとしたものであるといえよう。本書が取りあげている思想家たちを一瞥するために「目次」をここに引いておこう。

## 序言

第一部 ドイツ哲学者の思想世界に見られるインド

## 序論

- 1 カント
- 2 ヘルダー
- 3 ローマン派の思弁的宗教哲学者たち

## 4 シェリング

## 5 ヘーゲル

## 6 クラウゼ

## 7 ショーペンハウアー

## 8 ニーチェ

## 9 十九世紀のほかの哲学者たち

## 10 現代の思想家たち

第二部 さまざまな世界観によるインド解釈

## 1 キリスト教神学

## 2 マルクス主義

## 3 神智学と人智学

## 4 ドイツにおけるインドの宗教団体

## 結語

ドイツ思想の研究者ならともかくそうでないものにとつては、ここに並べ立てられた思想家たちの名を見ただけでしり込みしてしまうかもしれない。しかし、引用され

る種々のインド観のなかに自分と同質のものを見たり、あるいは辟易し、また啓発されるものであろう。インドに対する彼らの距離のとり方を知ることが、私たち自身の接近の仕方を知ることにもなるに違いない。

例えば第一部10「現代の思想家たち」のなかで引かれるカスナー(Rudolf Kassner 1873-1959)はこのように言う。「腕が六本あったり頭が三つあったりするインドの神々は反擬人論的世界観の表現以外の何ものでもないのであって、彼らはこうした奇怪なものから形なきものの名前に到達しようとするのである」(一九一頁)と。なるほどこのように言われてみれば、あの象の頭をもち腹のつき出した神ガネーシャや、猿神ハスマーンなどに少しは近づく術があるのかもしれないと思ひもする。

あるいはカイザリング(Graf Hermann Keyserling 1880-1946)——著者はその批評眼を高く買っている——の仏教についての視点はおもしろい。「仏陀はありのままの現実を直視しこれを認識する勇氣を説く。……とりわけ先ず徹底的にあきらかに肉体の現象にある醜悪な厭うべきものと考えられているものについて、排世作用から死後の腐敗にいたるまで、瞑想するよう

教える。……肉体的なものを非現実的なものとするためではなくて、逆に厭うべきものも人間から切り離すことのできない現実であると認識するためにである」(一八四頁)と。さらに別のところでは、「しかしながら仏陀の観点以外にも宇宙的に可能なほかの観点も存在するのであって、……人生が仏陀の観点からすれば単に苦しみ多き生滅と見えるのが正しいのと同様、他の観点からすれば……生滅ではなくて、生滅によって表現される意味連関が真実の窮極のものであることも正しいのである」(一八五頁)などともいつている。

本書の特徴は、以上に述べてきたことに加えて、著書グラッセナップの叙述の仕方にもある。訳者はその「あとがき」でこのようにいう。「その流れの全体が実に淡々とした筆致で、しかも驚くべき博識と深い愛情と更には鋭い批判眼とで観察された見事な平衡感覚をもって描き出されている」と。また「この書物におけるグラッセナップ教授の批判的言辞は抑制が利いていて決して節度を失わない。むしろそれだけに一層重みを加えているとさえ言えよう」ともいう。

ところで、訳者も関説していることであ

るが、第二部 3 「神智学と人智学」という項目に著者はかなりの頁数を費している。これまでの批評的態度とは異って、詳細に紹介しているのはいささか奇異な感がある。その著者の報告を見る限り、彼らは特定のインド観を提示しているのではなく、インド思想の一部分を用いる一つの宗教的団体にすぎない。にもかかわらず著者がこれほど細かに報告しているのはなぜだろうか。現代のドイツの思想家たちが東洋を問題にするときどうしても視野にいれざるを得ないほどの影響力をもっているからなのであるだろうか。ただ、マドラス近郊のアディアールに本部をおく神智学協会から、アディアール・ライブラリーという叢書が出版されている、インド学研究者に多大な便宜を与えていることは付記する必要がある。

さて最後に著者について少し述べねばならないが、このドイツの名高いインド学研究者は、わが国にもたびたび紹介されてきており、また本書の「まえがき」として寄せられている三枝充恵教授の「グラレーゼンツ先生のこと」の中にも著者の略歴が述べられている。さらに詳しくは、Wilfried Nölde, *Helmut von Glasenapp* (1891-1963) (ZDMG Bd. 114, 1964) を参照せ

れるとよい。また、グラレーゼンツの遺志によって設立された「グラレーゼンツ財団」からは、ドイツのいまは亡きインド学研究の著者たち個々の論文集が出版されている。その叢書の第二冊目にグラレーゼンツの著作目録が収められており、第一八冊目にはその補遺と、グラレーゼンツ自身の論文集が収められている (*H. v. Glasenapp Ausgabe kleine Schriften*, Glasenapp-Stiftung Bd. 18, Wiesbaden 1980)。

本書はドイツのインド学・仏教学研究をとりまく思想状況を知るうえにも好個の書であるの言うまでもない。さらに付言すれば、訳者には『ニーチェと仏教』(法蔵館 昭和五七年) という著書がある。本書の「ニーチェ」の取り扱いと読みくらへるのもおもしろい。一読をすすめたい一書である。(宮下晴輝)

(四六版・四十三八頁・昭和五八年一〇  
月刊・法蔵館・二、九〇〇円)

小谷信千代著

『大乘莊嚴經論の研究』

著書には、大別して二種類がある。答え

るためのものと問うためのものである。學術研究書といえどもその例外ではないであろう。答えるための研究書は、読者に種々の便宜を与える点で有益ではあるが、その研究成果は辞書的な残骸を残してすぐに過去へと埋没していくのである。それに対して、問うための研究書は、決して便宜的とはいえないが、著者の問いかけが息吹きとなって感じとられ、読者に忘れがたい何かを与えてくれるのである。本書は、そのどちらかといえ、問うための研究書の方に属する著作である。内容は専門的であり、學術的に高度なものでありながら、「瑜伽行者たちは何の必要があつて『唯識』を主張しなければならなかったのか」という問いが本書の根底に流れているために、著者の仏教研究者としての信念が行間に感じられ、読んでいて楽しいのである。

さて本書は、大乘仏教を代表する瑜伽唯識思想にとって重要な論書である『大乘莊嚴經論』に対する研究である。内容の第一は、現在の学界における唯識思想研究の分野で注目されている問題、すなわち、(1) 『大乘莊嚴經論』に対する註釈者の問題と、(2) 『瑜伽師地論菩薩地』と『大乘莊嚴經論』